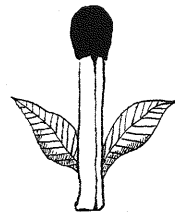


子どもの時間

岩田 純一



以前(一〇二号三卷)に「根にもつということ」でボヴィネリの研究を紹介したが、四歳の頃になると時間的な拡がりのなかで現在の自己の状態を、過去の自己の出来事と因果的に繋げ・関連づけて捉えられるようになってくる。したがって、この頃になると、過去のエピソードを自伝的な記憶として物語れるようになってくる。もちろん、養育者からの問いかけや誘導・援助によって共同想起的に過去の記

憶を思い出し、それを語ろうとするのは、もつと早く二歳頃からもみられ始める。しかし、子どもが自らの体験を時間・因果的な自伝的記憶として自発的に物語り始めるのは四歳頃になってからである。そのような時間的に繋がった線としての自己認識によって、過ぎ去ったじぶんの出来事を今のじぶんと因果的に関連づけるようになるだけではない。それは同時に、未来にありうるじぶんを想像し、それ

を先取しながら今のじぶんと関連づけて物語ることも可能にさせるように思える。このように連続して継起する自己の時間・空間的なペースブレイクが後先の方向に拡がっていくのである。だからこそ、過去のじぶんの経験エピソードを今に活かすだけでなく、他方においては「こうあってほしい」「こうありたい」「あのようになきたら」と、じぶんの希望を物語り、それにしながら現在のじぶんの行動を計画・調整していきけるようになってくるのである。それは時間的な先のじぶんの状態を考えながら計画を立て、その青写真にしたがって、それが達成されるように自己の行為を調整していくプランニング能力として現れるようになってくるのである。

子どもの希望

子どもは、じぶんの未来を希望としてどのような語りなのであろうか。その一端をうかがうものとし

て、石川県七尾市の保育所二十一か園において三歳児～五歳児クラスを対象に、七夕行事の際に一斉に行われた調査研究（岩田陽子二〇〇三「子どもの希望について」日本保育学会第五十六回大会発表論文集）がある。それは七夕の笹竹に結ぶ短冊にじぶんの願い事を書くという保育の流れのなかで行われた。そこで、子どもは「おとなになったら、どんな人になりたい」とたずねられ、その願いがかなうように、星の王様あてに書かせたのである。もちろん、文字の書けない子どもは担任の保育者が聞き書きするといった方法をとった。それらをながめると、子どもがさまざまな願い事のイメージをもっていることがうかがえる。

年少児であつても無反応は少なく、じぶんの願い事を答えることができる。しかし、その内容にはやはり年齢による違いが明らかにみられるようである。子どもの願い事は、いくつかのカテゴリーに分

類して内容が分析されているが、特徴的な年齢差がみられた結果に限って述べてみよう。年少児は、「アンパンマンになりたい」「ウルトラマンになりたい」「ドレミちゃんになりたい」といったテレビのアニメや絵本に登場するキャラクターをあげる者が半数以上にもなる。このような反応は、それ以降は年長児から年長児へと急激に減少してくる。とくに年長児には一〇パーセントちよつとしかみられなくなる。それに代わって、大きな変化がみられるのが職業をあげる反応カテゴリーである。それらは「ケーキ屋さん」「お花屋さんになりたい」「警察」「看護婦になりたい」「パイロットになりたい」といった具体的な職業をあげる反応である。ちなみに、年少児はそれが二〇パーセントに満たないが、年中児で四〇パーセント近くになり、年長児にはほぼ六〇パーセントに達していた。ヒーローやヒロインといった架空のキャラクターではなく、身の回り

のより現実の社会的な職業をあこがれとしてあげるようになってくるのである。また、全体的にみると割合としては少なかつたが「うができるようになる」とい「優しい人になりたい」といった技能・能力や性格・容姿へのあこがれを願いとしてあげる反応もやはり年少から年長児にかけて増加していくのがみられる。年少児では四パーセント未満であるが、年中、年長児には九パーセントから一六パーセントへと増えてくるのである。このような結果は、年中から年長児にかけて育つ社会的な現実認識のなかで、明日に向かって生きるじぶんの希望を具体的な職業イメージとして思い描けるようになり、さらに、あこがれる技能・能力の獲得や理想とする性格・容姿などを現実・具体的なじぶんの目標として心にもつようになつてくることを示唆するのではなからうか。

このような結果をみると、年中の四歳頃から、時

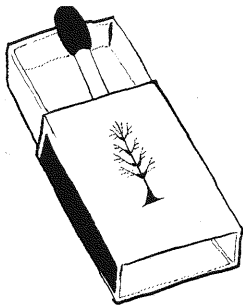
間的な見通しのなかで、じぶんがなりたいたい現実・具体的な未来のイメージ（将来に希望する自己）を思い描くことができるようになってくるのである。そのようなじぶんの希望や期待の語りのなかにこそ、子どもが時間的な見通しをもって行動する、じぶんの行動を計画するといった能力の育ちの一端をうかがうこともできるのではなからうか。

子どもにとつての死

四歳の頃から、時間的に拡張された線として、過去から現在の自己を因果的に繋げて捉えられるようになってくる。それとともに、子どもは今から遡りじぶんの出生に至るまでの過去に関心をもつようになってくる。たとえば家族のアルバムの写真などをみて、過去のじぶんの姿を認め、そのときのじぶんの様子や、じぶんが何をしているのか（出来事）を母親から熱心に聞いたただそうとするようになる。そ

して、その頃のじぶんの出来事を母親から語られるなかで、それらがじぶんの過去の時間として紡がれ、自己の記憶として形づくられていくことになるのである。さらに遡るうちに、アルバムの写真のなかにじぶんだけがまだ存在しない時間があることに気づきはじめる。時間的な遡りの向うに自己がない未生みしょうの時間的な拡がりがあることに気づくのである。それは、おそらく子どもにとつては奇妙な感覚の体験をもたらすのであろう。

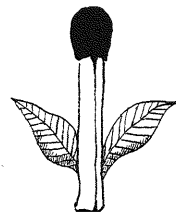
◎お兄ちゃんとお母さんが昔の遊園地での写真をみながらなつかしそうに思い出を話している。ゆうきくん（年中児）がまだ生まれる前の写真である。したがって、そこに



はゆうきくんの姿がない。ゆうきくんは、楽しく話
されている写真にじぶんが登場せず、話題から取り
残された悔しさから「ぼくも知ってるよ、ぼくはお
母さんのおなかの中からみてたもん」と言う。

子どもにとっては、今の家族と一緒にないじぶん
の未生の時期があったことは不思議でもあり、理解
しにくいことなのである。その証拠に、ある時期に
は「どうしてほくないの」と、子どもがその不思
議を口に出して親に問うことがしばしばみられる。
しかし年中になる頃には、じぶんが生まれる前の時
間があることを何となく分かってくるようである。
それが、ゆうきくんの「お母さんのおなかからみて
たもん」といった表現にもみられるように思われ
る。このエピソードから、子どもがこの頃には直感
的にじぶんの誕生の向こうに拡がる未生の間の時間
に気づき始めるのではないかと思われる。

そのようなじぶんの誕生を
超えた時間の気づきだけでは
ない。他方において、じぶん
の未来を語るのと同時に、そ



のさらに向こうにはじぶんがもはや存在しなくなる
時間があることを予感し始めるようである。それ
は、現在のじぶんの遠い先にじぶんの死を予感し始
めるようになってくることである。年中児に入る
と、ごっこ遊びのなかでも、生と死という二項対立
的な遊びは子どもが関心をもつテーマとなつてく
る。五歳も近くになると、会話のなかで「死
んだら」「死ぬ」といった表現となつてもみられる
ようになってくる。何かのきっかけから、子どもが
「じぶんやお父さんお母さんがずーつとすればどう
なるの」「ずーつとすると死ぬの」「いつ死ぬの」
「死んでからどうなるの」と疑問を口に出して心配
そうにたずねることもみられる。もちろん、「生」

や「死」についての生物学的な概念が、子どもとわれわれとは異なることは発達心理学的な研究からも明らかである。そうであるとしても、この頃には、じぶんにとって大切な家族とはずっと一緒にいたわけではないし、またこれからもずっと一緒にいられないといった具体的な脈絡において、「未生」や「死」という自己にとっては闇の時間を直感し始めるのではなからうか。そこには、自分の存在とは無関係な時間の流れ、その流れのなかに点として自己が存在するといった自己認識の萌芽さえうかがえるように思われる。

あるエピソード

ここに五歳の頃にかけてのK児の保育記録から、そのなかのエピソードをながめてみよう。

◎一月頃から、生活の時間に区切りをつけるため、

数字に興味がでてきたK児に、朝起きて日めくりのカレンダーを一枚ずつ破らせ、その日が何日かを教えることにした。

ある日のこと、少なくなってきた日めくりカレンダーをみて、突然に「アアア、七月か！ もうこれだけしかないよ、どうする。もうぼく死んでしまふよ、おじいさんになってしまふ」と心配そうに言う。

同じ日に、遊びにきたYくん「六月はYくんの誕生日だった、そして七月はNくんとSちゃんの誕生日だね、八月はぼくだよ、八月になるとぼく五歳になるんだよ」と、誕生月を比較するように言及する。

◎日めくりのカレンダーが二十五日から滞ったままになっている。Kはそれをみつけて「あつ、カレンダーめくつとらんわ、お母さんきょう何日やつ

た?」、母「きょう遠足行ったんだから金曜日でしょ」、K「あっそうか二十九日か? ほなやぶつとかないかんわ」とかためて破り、「じょうずに破けたわ」「ほんとにもうちよつとになったわ」と言う。母「Kちゃん新しいカレンダーくるからいいよ」、K「いつくるん」、母「このカレンダー終る前にまたくるからいいよ」、K「それでもみんな死ぬんや、ぼくも死ぬんや」、母「ちがう、あたらしいカレンダーくるから死なへん」「Kちゃんなんで死ぬっていうの? なんで?」、K「だって、おはかがいっぱいあるやない、はいらないかんし」、母「あれは死んだ人が入るのよ」、K「そうや、死ぬんや、お母さんもいっしょに死ぬんやろ」、母「ちがうよ、お母さんのほうがさき死ぬよ」、K「ほな、ぼくどうするの?」、母「Kちゃんは今からおおきくなつてけっこんするんや、ほんでまたKくんの子どもができるんよ、そしたらKくんは死ぬんやで、

K「ほな、それいつ? あしたか?」、母「ちがう、ずつとあとや」(十月)

◎新しいカレンダーをべらべらとめくって、K「これ終わったら、お母さん死んでしまうよ」、父「Kくんはどうなるの?」とたずねると、K「ぼくはまだ死なない、子どもだからつづくから」、父「パパは?」と言うと、K「パパはまだ死なない、べんきょうしないといけないから……」(十二月の末)

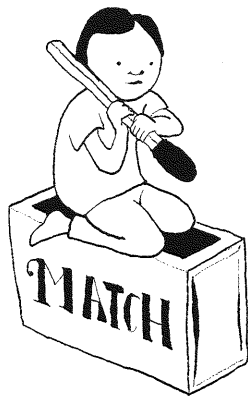
このようなエピソードの出現は、おそらく、この頃にかけてK児にみられた数への興味や関心(計数、数の多少、順序づけ)と平行・関連しているように思われる。1に続き2がやってくる。3は2のあとに起こり、4は3を追ってやってくる。そして2は2の前の1を含み込み、3は2を、4は3を呑み込みながら数字を積み重ねていく。そのような数

は、まさに歴史的時間の拡がりと同様の構造をもっている。したがって、数への理解の深まりは、自己の時間的な拡がりや、生を超えた時間的な拡がりのなかの点としての自己の認識と密接に関連し、繋がっているのではないかと想像される。これは筆者がいただく密かな仮説ではあるが。

これら一連のエピソード記録をながめると、子どもはわれわれのような生物学的な生命観や時間の認識をまだ持ち合わせてはいない。生きる時間が、日めくりカレンダーの残部といった唯物的なものとして捉えられている。しかし落語にみられるように、地獄では命の残りをろうそくの長さで測られているといった比喩的な発想を思えば、子どもをまんざら笑うこともできないだろう。前述のようなエピソードは、子どもが未来の生の向うに、じぶんの存在を超えた時間を予感し始めることをうかがわせる。

われわれは、生が時間の流れのなかにある一瞬の

存在にすぎないことを知っている。じぶんが生を受ける以前から、じぶんのあずかり知らない未生の時間があり、じぶんが死んでも、何事もなかったように未来の時間が流れていくことを知っている。すなわち、自己の生（存在）は、それとは無関係に流れる時間や、無辺の空間を占める点にすぎないことである。未生の過去は歴史として他者から聞くことによつて他者と共有して生きることも可能である。しかし、自己の生の向こうに流れる死後の時間は、まさにだれも語らない・語りえない闇であり、だからこそ子どもにとつてさえも死は不安を喚起するこ



とになるのであろう。

わがこころ

四歳の頃になると、子どもは過去の体験を自伝的な記憶として物語れるようになってくる。これは過去から現在にいたって時間的に継起する自己認識の成立である。また時間的な過去に遡及して自己を物語るだけではなく、時間的に順向して未来の自己を物語るようになる。このように自己のパースペクティブが時間的な後先へと拡がってくるのである。それによって、過去の出来事を今と関連づけながら考える、先の自己を想定しながら今の行動を考えていくといったことが可能になってくるのである。しかしながら、自己認識の時間的な拡がりはそれにとどまらない。子どもは自己の存在を超えた時間的なパースペクティブがあることにも直感的に気づき始めるようにもなってくる。原初的な形ではあったと

しても、恒久的な時間の流れのなかに自己の存在を位置づけて覚知し始めるのである。

このような自己認識の始まりは、子どもの行動や態度にどのような変化をもたらしていくのであろうか。そのひとつは、他者とは違うじぶんの存在の唯一性を子どもに感じさせていくことになるのではなからうか。もちろん、そのような自己の存在認識がより根源的な問いとして自覚的な意識にのぼってくるのもっとあとのことであり、小学校の中学年からの頃であると思われる。それは、「なぜじぶんはじぶんなのか」「なぜじぶんはここにいるのか」「どうしてじぶんはここにうまれてきたのか」「なぜじぶんは他の人間ではないのか」といった、自我体験と名づけられる意識をともなっており、あらわれる。しかしながら、そのような意識の原初的な芽生えは、すでにこの四、五歳児の頃においてもみられるのではないかと思われる。

(京都教育大学)